

〔共同研究：泉州の歴史と文化 III〕

岸和田高校所蔵の洋学書(1)

——落合保・元校長の洋学書収集——

松 永 俊 男*

大阪府立岸和田高等学校には、通常の図書室とは別に、新職員図書室と名付けた一室があり、そこには「古典籍文庫」とでも呼ぶべき蔵書が収納されている。この文庫の特徴の一つは、幕末から明治初年にかけて刊行された西洋文化についての啓蒙書が豊富なことである。その代表的なものを本誌で順次、紹介していく予定で準備を進めているが、今回はその第1回目として、この文庫全体について概説しておきたい。

なお、本文庫については、すでに本学の広報誌『アンデレクロス』に横山篤夫・岸和田高校教諭が解説¹⁾を寄せているので、これも参照されたい。

1. 落合保・岸和田中学第5代校長

この文庫は主として、旧制・岸和田中学第5代校長の落合保（おちあい・やすし）の収集によるものである。信頼できる資料から、落合の経歴をまとめておこう。

1880年4月 茨城県猿島郡古河町にて出生
 1899年9月 高等師範学校物理化学専修科入学
 1902年3月 同、卒業
 1902年4月 鳥取県農学校教諭
 1905年11月 大阪府師範学校教諭
 1907年6月 和歌山県立粉河中学校教諭
 1910年9月 大阪府立岸和田中学校教諭
 1921年4月 同、校長
 1942年3月 同、退職
 1962年8月 死去

1943年発行の紳士録²⁾には、次のように記されている。

落合 保 正五勲五 大政翼賛会府支部協力

会議員 岸和田市岸城町1761 [閲歴] 茨城県重正三男 明治十三年四月二十四日生 同三十五年東京高師卒業鳥取農業天王寺師範粉川岸和田各中教諭岸和田中学校長歴職 昭和十七年三月退官同年七月現職に就く 宗教浄土宗 趣味 読書古書 <後略>

32年間も同じ学校に勤務し、そのうち21年間は校長を務めたことになるが、これは現行の教員人事では考えられないことだろう。校史の『岸和田高等学校の第一世紀・通史編』³⁾にも、「21年同一中学校の校長であったというのは、大阪の府立中学校長としても異例の長さであった」(p. 320)とあり、「岸中—岸高の百年のうち21年を占めるといふ以上に、そのカラーの形成者でもあった」(p. 320)と述べている。

以下に同校史から、落合校長の功績についての記述を抜粋しておこう。

落合校長の業績の一つに、郷土資料室というミニ博物館を創ろうとしたことが挙げられる。専門外の歴史や教育学にも関心を示し、従来から岸中に蓄積、収集されたものも合せ地域にも呼びかけ、自らも購入する等して、和漢書、古文書、絵地図等そのまま散逸してしまいかねない地域の文化財を岸中に集め、自らも研究して、単にその解題にとどまらず系統的に学習、

1) 横山篤夫「岸和田高校に収蔵されている古典籍文庫」『アンデレクロス』89号、1999年5月、pp. 46-48.

2) 『大衆人事録』第14版、帝国秘密探偵社、1943年、「近畿 中国 四国 九州篇」p. 58；複製版『昭和人名辞典』第3巻、日本図書センター、1987年

3) 『岸和田高等学校の第一世紀・通史編』大阪府立岸和田高等学校、1997年

*本学文学部

研究し、退職後の1945年（昭和20年）の敗戦直前に、本の発行等は非常に困難ななかで『岸和田藩志』という著書を発行しその成果を世に問うた。その他多くの著作を残し、現在の研究でも参照文献に挙げられるものも少なくない。

同時に、岸中の教職員に自ら研鑽することを勧め、積極的に機会を与え、一定の成果が挙げると岸中で出版物にする等、一地方の教育機関であることだけで満足せず、地域の文化センターとしての機能をも果たせるよう努めていたことが窺われる。勿論その本人の努力や運の良さなどもあるにせよ、岸中の教員から高等教育機関の教育者、研究者に転出していった人が何人も出現したのは、そうした岸中の空気のなかで可能になったことも見逃せないであろう。〈中略〉

校長となつてからは生徒への授業は、修身を担当し、孝経をテキストに厳密な考証を加え道徳の中核に儒教の忠孝仁義を説いた。忠孝仁義を説くことは、当時の教育界にあって珍しいことではなく、ごく一般に説かれてきたが、落合校長のそれは、原典をふまえて岸中の状況にあわせて教育理念として自信をもって説いたところに、単なる「お説教」を越えた迫力で生徒達の心に響くものがあったようである（pp. 320-321）。

2. 落合保の著作

(1) 『岸和田藩志稿』1945年

落合の編著書のなかで、唯一、公刊されたのが本書である。638ページの厚表紙本で、表紙表裏に書名はなく、背書名は『岸和田藩志』と記されている。ところが扉には、「落合保 執筆、岸和田藩志稿、舊士族授産場発行」と記載されている。同書冒頭の「自叙」でも落合自身が「岸和田藩志稿」（p. 3）と記しているので、書名としては、国立国会図書館の目録通りに、『岸和田藩志稿』を採るべきだろう。ただし、校史『岸和田高等学校の第一世紀』では『岸和田藩志』の書名で記載しており、古書店の目録でも『岸和田藩志』と記していることが多い。

巻末の奥書には書名はなく、「昭和20年4月1

日印刷、昭和20年4月5日発行、非売品。著者、岸和田市岸城町1761、落合保。発行者、岸和田市岸城町1897番地、舊士族授産場」と記されている。

内容は、1640年岡部氏入封から1871年廃藩までの岸和田藩の歴史を、「藩主篇」「藩制篇」「民制篇」などに分けて記述したものである。

なお本書は1977年に『岸和田藩志』の書名で復刻、刊行されている⁴⁾。この復刻版の巻末には、落合の写真、年譜などが付記されている。これによると落合は、1941年に従四位に叙せられ、勲四等瑞宝章を授けられている。

(2) 孝経関係

校長に就任してから「修身」を担当した落合は、自ら孝経の原典研究を行い、下記4点の校訂本を自家出版で刊行して授業で用いた。

『開元天宝御注孝経』1931年

『古鈔較訂古文孝経』1935年

『我国古鈔古文孝経考異』1936年

『古鈔舊槧今文孝経考異』1936年

また、下記の研究書も自家版で刊行している。

『我国に於ける孝経の伝来』1933年

(3) 洋学書・教科書関係

落合は、1932年4月に『校友会誌第34号付録』の名目で、下記3点の論考を1冊にまとめた小冊子（38ページ）を刊行している。

「蘭学時代に於いて邦人の手に成れる理化書に就いて」

「蘭学時代より学制頒布まで理化教育の概況に就いて」

「本校記念文庫所蔵書に就いて」

最初の「理化書に就いて」はほとんど『舎密開宗』の目次紹介に終わっている。「理化教育の概況」はわずか5ページで、開成所、緒方塾、舎密局、および各地の藩校の科学教育の状況を略述している。「記念文庫所蔵書に就いて」に関しては、後に言及する。

この分野で独立した小冊子として刊行された

4) 落合保『岸和田藩志』東洋書院、1977年

ものに下記の2点があるが、いずれも資料の紹介記事に近い。

『蘭学時代の理化学』1933年

『学制頒布当時文部省指示の小学校教科書及び参考書』1934年

(4)その他

落合は日本史、とくに法制史にも関心を向けしており、それが文庫の蔵書に反映している。御成敗式目関係では写本2点、刊本4点を所蔵し、自らも『御成敗式目考異』(1935年)を自家版で刊行している。

国立情報学研究所の Webcat では同志社大学図書館所蔵の『泉南懷舊』(1933年)について、「落合保編」と記載している。同書は泉南地方に関する詩歌、論説などを抜粋した68ページの和綴じの小冊子であり、『岸和田高等学校の第一世紀・通史編』(p.265)では、「岸中国漢部(国語科)編」と記載している。同書の「序」を校長の落合が書いているが、担当教員たちが副読本として編集したものであって、落合の編著書として数えるべきではないだろう。

このほか岸和田中学で刊行した落合の著作として、『岸和田高等学校の第一世紀・通史編』(p.265)に『大阪府における官・公・私立中学校沿革略史』が記載されている。また、前述の『蘭学時代の理化学』の巻頭に、既出の刊行物として『鮮満及支那瞥見記』の記載があるが、いずれも確認していない。また、岸和田中学の『校友会誌』や大阪府教育会発行の『教育時報』にも多くの論考を発表しているとのことだが、これも確認していない。いずれ、より充実した落合の著作目録が、岸和田高校関係者などによって作られることを期待したい。

3. 収書の経過と目録の作製

1930年10月に岸和田中学で「教育勅語渙発40周年記念展覧会」が開催された。『岸和田高等学校の第一世紀・通史編』(p.186)には落合の草稿によって、「此の展覧会は、徳川時代から1890年(明治23)教育勅語渙発までの、普通教育に関する教授書数百種を、寺子屋教育、小学校・

中学校教育、英語教育及び雑の5部門に類別して陳列」とある。

前述した『校友会誌第34号付録』の「本校記念文庫所蔵書に就いて」の冒頭で落合は、「本校には、教育勅語渙発四十周年を記念して特設した文庫がある。其所蔵の大部分は、徳川時代から明治前半(23年まで)に亘る教育関係書である。それは予が心懸けて蒐集したものであるが、何分一人の片手間仕事であるから、非常に不備の点が多い」と述べている。

ここで落合のいう「記念文庫」が基になり、これに落合が退職時に寄贈したものなどが加わって、現在の古典籍文庫となった。他からの寄贈もあるようだが、大部分は落合の収集によるものと見て差し支えないようである。

この文庫については優れた目録⁵⁾が作製されており、それがこの文庫の価値を高からしめている。この目録作製に当たった慶應義塾大学付属研究所・斯道文庫は、和漢の古典に関する原資料の調査研究を中心に行っており、目録作製を中心となった大沼晴暉は斯道文庫所属の助教授である。目録作製の経緯は、作製者の大沼が目録の「あとがき」(pp.203-207)に記している。

それによると、きっかけは、大沼が現存する孝経の目録を作製する過程で岸和田高校所蔵の孝経類のことを知り、1982年12月に来校して孝経類を調査したことであった。その折りに大沼は、和漢書が未整理のまま校内各所に分散収蔵されていることを知り、それを整理する必要を学校に説き、目録作製に取り組むことになった。1983年8月4日から18日まで、同年9月16日から25日まで、1984年8月25日から9月1日まで、そして1985年2月9日から13日までの4回で、整理実務の全てを一応終えた。目録編集の実務はもっぱら大沼と大沼に同道した弟子が担った。岸和田高校関係者は補助的作業で協力し、調査費と出版費を捻出した。大沼はこの仕事について、「朝の8時半から夜の8時過まで昼食と10時・3時のおやつをはさんで、こうした

5) 慶應義塾大学付属研究所・斯道文庫編『大阪府立岸和田高等学校和漢書目録』大阪府立岸和田高等学校、1985年

毎日であった。目録は職人為事であるが、こうなるとまさに職人である」と述べている。

目録は手書きのオフセット印刷で、1985年9月に発行された。210ページの縦書き、洋装本で、1,450点の和漢書が収録されている。分類は漢籍と国書とに分ち、漢籍は経史子集の4部に、国書は内閣文庫の分類法に準拠し17部に分けている。

この目録は、まさに職人芸の典型を示すものといえよう。「書名」のもとに、「異名、巻数、著編者、刊写年、刊写者、注記」などを記し、下段に「函書の大きさ、冊数、函架番号」を記している。手書きの利点を生かして字体は原本のものを写しているのも、この目録の特徴である。

この目録の刊行後、新たに校内で見つかった函書と若干の寄贈書を調査のため、大沼は1986年2月8日から11日まで単身、来校して目録を作製し、翌年3月に『目録追補』⁶⁾として刊行した。これは24ページの小冊子で、漢籍10点、国書122点が収録されている。

『目録追補』の末尾(p.22)の表によると、目録の本編と追補を合わせて、漢籍は223点、1882冊、国書は1359点、4713冊、合計1582点、6595冊である。

4. 文庫の特徴

この文庫の中核となっているのは、江戸後期から明治中期にかけての啓蒙・教育書である。往来物や明治初期のさまざまな分野の教科書類が豊富にあり、福沢諭吉の主要な著作も所蔵されている。蘭学や英語の辞書と入門書も多い。なかでも注目すべきは、落合の専門分野である理化学関係の啓蒙書である。幕末から明治初年にかけて刊行された理化学の教科書・啓蒙書の主要なものが収集されている。本稿では、幕末から明治初年にかけて刊行された西洋学術の啓蒙書を広く洋学書と呼ぶことにしているが、洋学書がこれだけ揃っている文庫は少ないのではないだろうか。

6) 同上『大阪府立岸和田高等学校和漢書目録追補』1987年

大沼は目録本編の「解説」で、この文庫について、「これらは一点だけをとれば稀有の書物とは云えなからう。しかし、これを一つのコレクションとして見れば、他に類を見ない稀有の山貌を呈しているのが分る」(p.198)と述べている。確かに、この文庫の書架の前に立つと、欧米の学術を一刻も早く吸収しようとした明治初年の熱気に触れる思いがしてくる。

また、「一点だけをとれば稀有の書物とはいえない」としても、これを現在、古書として購入しようとするれば、数万円を要する書物が少ない。価格に換算しても、このコレクション全体でかなりの額になるはずである。

この文庫の漢籍の特徴は、孝経関係の多いことである。これは前述したように、校長になった落合が「修身」を担当し、孝経に基づく忠孝仁義を説いていたことによる。

落合は、西洋近代科学の教育を専門とし、その日本への導入に強い関心を示す一方で、儒教倫理を説いていた。ここに日本の知識人の一つの典型を見ることができ、この問題の分析は本稿の目的とするところではない。

5. 代表的な洋学書

前述した『校友会誌第34号付録』の「本校記念文庫所蔵書に就いて」は、落合が、「記念文庫現在書の中から蘭学関係書及明治維新後の理化学博物関係書だけを抜いて」、一覧表示したものである。明治21年までに刊行された86点について、書名、出版年、および著者名が列記されている。このうち、明治7年までのものから36点を抜粋して紹介しておこう。

『解体新書』安永3年、杉田玄白
 『蘭学階梯』天明8年、大槻磐水
 『万国新話』寛政元年、森島中良
 『平天儀図解』享和2年、岩橋耕珣堂
 『遠西観象図説』文政6年、吉雄南臯
 『和蘭薬性弁』文政8年、藤林泰介
 『気海観瀾』文政10年、青地林宗
 『植学啓原』天保4年、宇田川裕庵
 『舎密開宗』天保8年・弘化4年、宇田川裕庵
 『坤輿図識』弘化2年、箕作省吾

『西洋雑記』嘉永元年, 山村才助
 『気海観瀾広義』嘉永4年・安政5年, 川本幸民
 『三語便覧』安政元年, 村上義茂
 『洋算用法』安政4年, 柳河春三
 『化学入門』慶応3年・明治3年, 竹原平次郎
 『訓蒙窮理図解』明治元年, 福沢諭吉
 『天変地異』明治元年, 小幡篤次郎
 『博物新編補遺』明治2年, 小幡篤次郎
 『格物入門』明治2年, 本山漸吉訓点
 『格物入門和解』明治3年, 柳河春三ほか
 『博物新編訳解』明治3年, 大森秀三
 『天然人造道理図解』明治3年, 田中大介
 『泰西農学』明治4年, 緒方義一
 『啓蒙智恵の環』明治5年, 瓜生於菟子
 『訓蒙窮理問答』明治5年, 後藤達三
 『登高自卑』明治5年, 村松良肅
 『博物新編』明治5年, 合信
 『窮理発蒙』明治5年, 魚住宗太郎・宇喜田小十郎
 『窮理捷徑十二月帖』明治5年, 内田晋斎
 『物理訓蒙』明治5年, 吉田賢輔
 『物理階梯』明治6年, 片山淳吉
 『窮理贈答年中帖』明治6年, 高田義甫
 『増訂化学訓蒙』明治6年, 石黒忠憲
 『窮理智環』明治6年, 清原道彦

『農業三事』明治7年, 津田仙
 『理化日記』明治7年, 文部省

上記の図書の一部については、表記と出版年を『目録』によって訂正してある。また、ここに記載した出版年は、文庫所蔵の版の出版年なので、一般に知られている出版年とは異なる場合がある。たとえば、『博物新編』は咸豊5年(1855年)に上海で刊行されたが、この文庫の所蔵本は明治5年の和刻版である。また、片山淳吉の『物理階梯』は明治5年に文部省から刊行されているが、この文庫の所蔵本は明治6年の大阪府学務課版である。このような地方版の多いことも、この文庫の特徴になっている。

ここに記載したほかにも文庫には、『万宝玉手箱』、『万宝新書』、『秘事新書』、『西洋百工新書』、『百一新論』といった重要な図書が所蔵されている。次回からは、これらの洋学書から順不同で重要なものを順次取り上げ、その歴史的意義と文庫所蔵版の特徴について考察していきたい。今回は『博物新編』関係を取り上げる予定である。

謝辞

大阪府立岸和田高等学校の関係者の協力に深く感謝したい。

Kishiwada High School Collection of Scientific Books
Published in the Early Meiji Period (1)
—Contribution of Yasushi OCHIAI, a Former Principal—

Toshio MATSUNAGA

In the Osaka Prefecture Kishiwada High School, there is a special collection of scientific books published in the late Yedo or early Meiji period. This collection was assembled mainly by Yasushi OCHIAI (1880-1962), a former principal (1921-1942).

In this report, we describe briefly the life and works of OCHIAI and the outline of the collection.